

前川先生のご業績

川 野 美 智 子

前川哲郎先生は、長らく佛教大学文学部英文学科主任の要職におられて学科運営の大任にあたられる傍ら、通学生・通信生の両方にわたり、また学部・大学院のいずれの教育にも常に全力投球をしておられました。英語学担当の要でいらっしゃり、必修科目を含め大勢の学生たちのために英語学・英語教育のお講義、英語学関連テキストの度々のご執筆、また教職科目単位取得のための学生への授業が目白押しでした。卒業論文、修士論文の指導にあたっては常に原典を精緻に読み込むことを教えられ、指導所見には達筆の書き込みをびっしりとなされて、学生たちもどんなに励まされたことでしょう。

学科主任在任中は、カリキュラムの改訂、コース制の導入、今につづく学科主導の英国研修の開始などの大きなお仕事を果たされました。

公的なそれらの大任の傍ら先生の変わらぬ情熱はトマス・ハーディ文学の研究に注がれ、学生の論文指導はもちろん、ご自身も多くの論文を発表しておられます。定年ご退任時の最終講義でも、英語学のヘンリー・スウィート、19世紀後半の英詩人・小説家のトマス・ハーディ、これと同時代のアメリカの哲学者であり日本美術研究者であるフェノロサを三本の柱として、大変啓発的また興味深いご意見を展開されたのも記憶に新しいところです。日本ハーディ協会、フェノロサ協会の会長として長らく後輩の指導にもあたられました。

入学式、卒業式にあたっての先生のご訓示はいつも深い漢学の素養のにじみ出るもので、一例をあげれば次のようなものがあります。

「学びて時に之を習う、亦た悦ばしからず乎。朋有りて遠方より来たる、亦た楽しからず乎。(論語、学而第一)」

「礼を知らざれば、以て立つ無き也。言を知らざれば、以て人を知る無き

也。(論語、堯曰第二十)」

新しい門出にあたって、難しいながらも深い人生の知恵を考えさせられるお話はきっと学生の心にいつまでも残るに違いないと思われました。

私事ながら私が佛教大学に参りましたとき、前川先生は先輩として諸事にわたり細やかにご指導くださいました。本学では大先輩、と思っていましたら、先生のご来学は私に先立つことわずか1年。大学の慣習の違いにご自身も途惑われた結果のお優しさだったと思ひ当たりました。思えば半世紀昔同じ教室で同じ先生方の薫陶を受けたのですが、前川先生の博学強記には遠くおよびません。私にとっては結婚生活や転居で挫折したアカデミズムへの情熱が、先生の場合には片時も途切れることなくますます熾烈に燃え盛っていることと思われまふ。今後も学生指導にあたって頂ける幸運を学生の皆さんも感謝して、先生が残された真摯な学風を英米学科の学生・院生にも継承して行ってもらいたいものと願っています。